

石仏あれこれ

シリーズA 石仏を訪ねる

A4 一乗谷 西山光照寺跡 1976

森隆一



Wikipedia「一乗谷朝倉氏遺跡」より

A4. 一乗谷 西山光照寺跡 1976

福井に移った友人を訪ねたとき、彼の車で一乗谷朝倉館跡にでかけた。当時は、城戸ノ内町の集落から唐門の前まで車を乗り入れることが出来た。Google Map で見られる水堀が道路ではなかったか、水堀沿いに道路があったのかは定かではない。湯殿跡庭園も荒地に石が転がっている程度の印象しかなかった。ということで、西山光照寺跡に向かった。

一乗谷駅に着いたが、田んぼの中に線路が走っているだけで、車で西山光照寺跡には行けそうにないと判断し、歩いて向かった。現在は、駅の東北・足羽川沿いに福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が建ち、田んぼ道が拡張されているようだ。

福井県のホームページ「[西山光照寺跡概要](#)」

西山光照寺の創建は大同年間（806-810年）、最澄大師が開いた寺院を、文明3年（1471）越前統一の祖を築いた朝倉孝景が叔父である朝倉将景（光照郎用）の菩提を弔う為、真盛上人の高弟盛舜上人を招いて再興したのが始まりと伝えられています。朝倉氏に庇護され寺運は隆盛し一乗谷の真盛派の代表的寺院となりましたが、天正元年（1573）、朝倉氏が織田信長により滅亡させられると一乗谷も壊滅、西山光照寺も焼失したと思われます。当時は弘法大師空海が一乗谷を訪れた際、石造大仏を造営し自ら彫刻した聖観音像を胎内に納めたものが偉容を誇っていたとされますが、戦

禍により胎内仏は持ち出されたものの石造大仏は粉塵に帰したそうです。慶長11年(1606)、福井藩初代藩主結城秀康により福井城下に移され再興し現在に至っています。西山光照寺跡には大型の石仏が40体、石塔、石仏が340体以上、境内には大規模な堂宇の礎石や地下倉庫、石組、石積施設、墓地などが発掘され当時の繁栄を物語っています。

この他に「[福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館](#)」もある。

山手のほうに次の虚空蔵菩薩が石でできた基壇の上に置かれていた。



これより下がった所に3棟ほどの覆屋に20体ほどの石仏が並んで置かれている。Google Map を見ると、覆屋は改築されたようで、石仏も記憶よりも増えている気がする。この付近で発掘されたものであろうか。

これらの幾つかを次に示す。

まずは、不動明王で、角度を変えた2つの写真を掲げる。



次は地藏と千手観音である。



次の(阿弥陀)如来も置かれている。
筆者には如来はハードルが高く、
いい写真が撮れていない。

下・左の童子像は前出の不動明王のものと思っていたが、下・右の写真から勘違いしていたようだ。



コトバンク「八大童子」から、不動明王には八大金剛童子が随従するということである。各童子の名前は、慧光・慧喜・阿耨達・指徳・烏俱婆迦・清浄・矜羯羅・制吒迦である。二童子の場合は、制多迦・衿迦羅である。

福井城下に移され再興されたということから、これらは残された墓標仏ではないかと思う。石材は笏谷石ということである。笏谷石を用いた石仏

は、福井・武生と琵琶湖西岸の玉泉寺・西教寺にもみられる。

Wikipedia「笏谷石」では

笏谷石は、デイサイト軽石火山礫凝灰岩で、福井県福井市の足羽山で採掘される石材である。狭義では足羽山北西山麓にあるいわゆる笏谷地区で採掘された石。一般的にはデイサイト軽石火山礫凝灰岩からなる笏谷層から採掘された石のこと。特徴は、青緑色で、水に濡れると深い青色に変化する。柔らかく、加工に便利。きめが細かい。火に強い。

成分：SiO₂量は63～77%、Al₂O₃量は11～22%[5]。鉱物組成は石英、曹長石、灰長石、正長石、赤鉄鉱、方解石、緑泥岩等。

ということである。石の感じも使用法もよく似ている大谷石については

Wikipedia「大谷石」では

大谷石は軽石凝灰岩で、栃木県宇都宮市北西部の大谷町付近一帯で採掘される石材である。柔らかく加工がしやすいことから、古くから外壁や土蔵などの建材として使用されてきた。現在も蔵の壁面などに使われている。

成分：基質は浮石質ガラス・斜長石・石英を主とし、少量の黒雲母角閃岩輝石で構成され、珪酸、第二酸化鉄、酸化アルミニウム、酸化マンガン、石灰、酸化マグネシウム、カリウム、ナトリウムなどを含む。

ということである。

次の2枚は石見銀山で撮ったものと思ってきた。アルバムの位置からは、

西山光照寺跡でとったものであるが、記憶にない。



友人が一緒だったため、小一時間程で切り上げた。

Wikipedia「一乗谷城の戦い」から、同戦いは元年8月(1573年9月)に行われ、朝倉氏は滅びた。したがって、これらの石仏群は450年程前に造られたことになる。

このとき撮った強風下の越前海岸の写真を掲げておく。



この写真からは、親不知の由来が実感できる。

ここで出来た白い泡(波の花)が風に飛ばされて、電線に付着し、腐食し易くなるということである。

あとがき

ここでは、石仏写真に最終的に踏み切る契機となった、越前 一乗谷・西山光照寺跡を取り上げた。当時持っていた文献は

「越前一条谷石佛」水上 勉・一色 次郎・鈴木 秀雄、鹿島出版会、1975 である。

越前 一乗谷は、まず、京都駅から福井駅までサンダーバードで 1 時間半で着く。福井駅から一乗谷までは 2 つの方法がある。越美北線では 20 分ほどで一乗谷駅に着く。1 日 8 本である。バスでは、これも 1 日 8 本であるが、朝倉資料館前まで 22 分、さらに 3 分で朝倉館前に着く。

福井 IC から朝倉資料館前までは数キロで 10 分ほどである。

越前と水上勉といえは、越前竹人形が浮かんでくる。

Wikipedia「越前竹人形」では、

越前竹人形は、福井県の越前地方で竹を使って作った人形で、坂井市及びその周辺地域で作ったものは地域団体商標と福井県の郷土工芸品に指定されている。昭和 20 年代、師田保隆・三四郎兄弟は竹籠・花器を作った際の廃材を再利用し、遊び心で人形を作り始めた。1955 年の富山博覧会への出展をきっかけに、それまでの竹籠作りを止め、人形を中心に製作し現在に至る。坂井市丸岡町には越前竹人形の里という施設がある。

小説『越前竹人形』は、1963年に発表された水上勉の小説。同年に映画化され、その後ドラマ化された。

あらすじ：越前国武生竹神部落に副業として竹細工を広めた氏家喜左衛門が死んだのち、息子の喜助のもとへ芦原の玉枝と名乗る人物が訪ねてきた。喜助は玉枝を嫁に迎え、父が玉枝のために作った竹人形に触発されて、一对の夫婦を表す竹人形を作り上げる。